

「第24回住まいのリフォームコンクール」総評

今年度の応募総数は664件、戸建77%・共同建・連続建23%である。部門別の最多は、総合の415件で、ほぼ例年通りであった。居室部門とエクステリア部門は応募比率が下がったにもかかわらず、力作が多く見られた。本年度の特徴を挙げると、以下の3つである。

- 1 工事費の高額化
- 2 マンションリフォームの平準化
- 3 地方からの応募案の増加と古民家事例の増加

- 1 該当部分平均工事費が十数年ぶりに1000万円を超えた。バブル経済時期なみに回復したと言われる景気の影響かもしれないし、資金に余裕のある団塊世代が、リタイアを機に改修するケースが増えたせいかもしれない。理由はいろいろ考えられるが、リフォーム内容がリッチな印象を持つ案は確かに多かった。設備機器のグレードも上がっている。
- 2 マンションでは、リフォームの技術レベルは確実に上がっているが、チャームポイントのある案になかなか巡り合えなくなった。リフォームの考え方、やり方が平準化してきたといえようか。奇抜を求める訳ではないが、「土間」や「離れ」といった面白いコンセプトも現れ始めていることでもあるし、大胆なやり替えの提案がほしい。費用のかけ方は一点豪華主義がリーズナブルと考えている日の如き応募案が目立った。これは、マンションの応募件数の漸減とも関係があろうし、今は施主が大胆な内容に対しては慎重になっているのかも知れない。
- 3 今年は特に東北、四国、九州の応募数が増えた。気候風土や慣習など厳しい条件の下で、上位賞に食い込む作品に仕立て上げるのは容易ではないが、地域ならではの特性を生かす点では、新築よりもリフォームの方が効果的である。築100年超の古民家や蔵の改修事例が多くなったのもこの流れであろう。伝統的構法のリフォームで重要な要素は耐震補強と断熱改修である。耐震補強は基礎のRC化など全体に施工が難しく、コストアップしやすいが、再生された建物は、新築にはない質感を持って今後も百年単位で生き続ける。これは効率性だけで進んできた我々の文化や、均質化した建築景観からの転換意識の現れであろう。これには団塊世代の影響もあるように思う。一般の住宅にもこの流れが浸透してほしい。

高齢者への配慮、バリアフリー化は今や一般的となったことは喜ぶべきことである。他方、サステナブル時代と言われる割には環境、省エネ、サステナビリティを謳うものは多いとはいえないのは残念である。

特別賞の選抜では、例年以上の議論を重ねた上、僅差で決まったものが多かった。僅差の原因は、マンションにおける平準化と応募側のプレゼンテーション力の不足にあると思う。応募用紙の方式変更により、コンピューター上で自由に編集できるようになったが、逆に各案の差が見えにくくなった。小さい写真や判りにくい図のため、審査の初期段階で落ちてしまう作品も多かった。審査委員は短時間で多くの作品を見る。「プレゼンテーション力」が問われるようになったのである。図面は明快に、アピールしたい写真は大きく見せるのが定法である。

各賞についてはそれぞれの講評をご覧いただきたいが、今年は、全体的な完成度の高さで評価されたものが殆どである。リフォーム全体が成熟してきたのかも知れない。完成度とアピール力では、設計事務所からの応募案が特別賞の大半を占めるのも無理からぬことである。苦言を言えば、デザイン性が高くなるのは良いが、反面、遵法を楽観している設計事務所も目立つ。特に若い世代にその傾向が強く、現地審査が徒労に終わることがある。設計業界への批判も多い今、プロとしての姿勢を再確認してほしい。

第24回住まいのリフォームコンクール審査委員会
委員長 上杉 啓

